

# 井口道生博士のご逝去を悼む

麓野 嘉彦 先端基礎研究センター長

Yoshihiko Hatano Director General, Advanced Science Research Center

本機構の先端基礎研究・評価委員会の委員長、研究開発顧問会委員の井口道生博士（米国アルゴンヌ国立研究所名誉主任研究員）には、2009年6月4日、シカゴ近郊の病院で肝不全のために急逝され75歳の生涯を閉じられました。あらためて、心よりお悔やみ申し上げます。

2009年2月に開催された第3回先端基礎研究・評価委員会においては、第2回委員会（2007年11月開催）で委員長の提案のもとに行われた“On-Site Visit”を含む新しい点検評価に対して本センターおよび本機構各部署が行った改善措置（参照：JAEA-Evaluation 2008-001）について、また本センターが次期中期計画へ向けて検討した結果の事前評価について、井口委員長の議事進行のもとで活発な審議が行われました。委員会の最終日には、「年度末に開催される今期最終の次回委員会ではまた活発な審議をお願いします」、「今夏は、ICRU委員会その他いくつかの研究集会で、また忙しくなります」などと元気に話されていた様子を印象深く思い出します。

井口委員長をはじめ各委員によって行われた熱意ある新しい点検評価と、それに基づいた多くの有益なコメントを大きなきっかけとして、これに本センター独自の「センタービジョン」に基づいた運営方式と自己点検評価が加わって、研究者の新しい頑張りや意識変革、研究環境改善へ向けての機構各部署の理解と協力が生まれ、多くの国際的トップレベルの研究成果とその応用・社会との接点が構築されました。このような成果と点検評価・運営方式に対して、評価室が“Good Practice”の認定を与え、また独法評価では本センターが「S」評価を獲得することに結びつきました。

井口博士は、1960年代初頭からアルゴンヌ国立研究所においてR.L.Platzman、U. Fano 両博士らと協力して、Curie、Roentgen 両博士らによる放射線発見以降行われてきた放射線と物質の相互作用に関するいわば現象論的な研究に対して、放射線作用を高エネルギー粒子と物質との衝突過程と捉えた理論的考察を行い、放射線の種類によらず普遍的な現象として広いエネルギー領域に分布する「二次電子」に着目し、電子衝突過程が放射線作用の本質であるとして、Bethe 近似のもとに理論体系を構築しました。その後、1970年頃からこの研究成果は理論、実験双方の多くの研究へと浸透しはじめ、物理学、化学、生物学、医学の基礎および応用へ大きな波及効果を見せながら現在に至っています。井口博士は、このような研究面で活発な活動を行うのみでなく、研究機関において研究計画をどのように立案するか、その研究業績をどのような理念と考えに基づいて評価・審査するかなどの、多くの研究機関、研究分野、研究者に共通の極めて重要な課題に対して、米欧、日本などでの点検評価に関するご自身の体験を踏まえて、しばらく前から独自の考えを持って実行されていました（参照：井口道生、日本物理学会誌、53(5),355(1998)）。本機構では、発足後間もない頃の研究開発顧問会において、井口博士によるその解説が行われ、その後の先端基礎研究・評価委員会において、先に述べた“On-Site Visit”を含む新たな評価手法が用いられました。

2009年3月以降、井口委員長は2月に開催された第3回委員会の報告書のまとめと次回委員会の開催準備等について、本センター研究推進室中川室員と連絡を取って進めていました。5月中旬頃に同室員より、井口委員長と連絡が取れなくなったとの報告がありましたので、井口夫人に電話連絡を行った結果、急なご病状を知り、まもなく6月4日ご逝去の訃報を受け取りました。なお、7月末に東京で多くの参加者のもとお別れの会が開催されました。ここに、謹んでご冥福を申し上げます。

その後、先端基礎研究・評価委員会の新しい委員長の選出が委員の互選によって行われ、市川行和委員（宇宙航空研究開発機構名誉教授）が委員長に選出されました。新委員長のもとで、本中期計画全体の成果について評価を行うため、第4回委員会が2月17、18日に開催されました。



故・井口道生博士「基礎科学ノート」26号の巻頭言にご寄稿いただいた際の写真